

子規がつくった俳句 その1

子規と漱石

漱石と松山でくらす

明治28年(1895年)8月、子規は松山へ帰ってきました。松山では、子規の親友・夏目漱石が中学校で英語の先生をしていました。2人は漱石が借りていた家で52日間いっしょにくらしました。子規が1階、漱石が2階を使いました。

このころの
2人が作った
俳句だよ。

く だ ぶ つ あ ん ね っ ち ゅ う
愚陀仏庵で俳句に熱中

漱石の下宿には、子規に俳句を教えてもらおうと、たくさんの方がやってきました。「松風会」という会の人たちです。この会は、松山で俳句を作る人たちが集まって作ったものです。子規たちは1階でたびたび句会(俳句を作る会)を行い、熱中しました。

そのうち、漱石もいっしょに俳句を作るようになりました。漱石は俳句を作るときに「愚陀仏」というペンネームを使っていたので、この家は「愚陀仏庵」と呼ばれたのです。

桔梗ききょう活いきけて
ししばばくくて
書かききばばくくて
斎さいららくくて
哉やななくくて
子規 仮かりの



▲子規 28才

愚ぐ陀だ仏ぶつは
主あ人のい名ななり
冬ふゆ籠こもりの
漱石 名ななり



▲漱石 29才

千エック! 愚陀仏庵をのぞいてみよう



▲子規と漱石がいっしょにくらした愚陀仏庵の1階を復元しています。

句会のほかには どんなことをしたの？

病気だった子規は、体力をつけようと、漱石や松風会の人たちといっしょに松山市内のあちこちへ出かけました。お寺や温泉に行ったり、芝居を見たりしています。そして、この時作った俳句などをまとめた「散策集」という本を作りました。



▲子規と漱石が散策した当時の道後温泉

最後の旅

「柿くへば…」

子規は松山で約2か月くらした後、東京へもどることにしました。東京へ向かう途中、大阪や奈良に立ち寄りました。奈良では、東大寺や法隆寺などを見物しました。

そして、「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」という俳句を作りました。子規が作ったたくさんの俳句の中でも、特に有名な俳句です。

歩くのが大変

子規はこの旅の途中、腰が痛くて歩くのが大変でした。「リウマチかもしれない」と思った子規は、薬をもらって、旅を続けました。

しかし、次の年、医者にみてもらうと、脊椎カリエスという病気だと言われました。これは、結核菌が背骨の中に入って骨を溶かしてしまうという大変な病気です。この後も病気は悪くなり、子規は起き上がることもできなくなります。

この松山から東京へもどる旅が、子規にとって最後の旅となりました。

最後の帰郷

子規は、16才で東京に出たからたびたび里帰りをしていましたが、この後帰ることはありませんでした。これが最後の里帰りだったのです。



千エツ! 子規の俳句



柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

法隆寺の茶店に憩ひて

子規

